

目次

寄稿: 科学者としての僕の人生のかたち (森田 康裕)	1-2	寄稿: フロリダのちょっとしたはなし (森山 貴仁)	4-5
寄稿: 私の「留活」～周りの力、自分に出来ること～ (新見 有紀子)	3-4	連載: アメリカ留学とインターンシップ (2) (片桐 範之)	6
		お知らせ: メンタープログラムのご案内	7

寄稿: 科学者としての僕の人生のかたち

12年ぶりのアメリカ。久しぶりに住んでみて、変わったなと思うことも相変わらずだなと思うこともある。時代の変化なのか、あるいはマサチューセッツ州のリベラルな土地柄なのか、この小さな町アマーストでたくさんの鍼灸師がしのぎを削っているのにはビックリさせられる。90年代にアメリカに住んでいたとき、ある友人が「アメリカはメルティングポットではなく、ただのベジタブルスープだ」と言っていたのを思い出した。12年経って、少しは野菜が溶け始めて、成熟した文化の味を出し始めているのかな、そんな風にも思う。

僕は2012年の1月にマサチューセッツ大学アマースト校でテニュアトラックの助教として採用され、大阪大学から異動してきた。着任してからこの1年半というもの、研究室を立ち上げ、自分の研究を軌道に乗せるのに四苦八苦してきた。ここで「四苦八苦」と書いたけれど、それに勝る充実感も同時に味わっている。自分のラボを持てたという喜びはとても大きなものだ(写真 1)。

なぜアメリカに戻ってきたのか?僕がジョンスホプキンス大学で大学院生だった頃ある人が「僕はアメリカにいて日本が懐かしくなり日本に帰ったけれど、戻ってきたら今度はアメリカが懐かしくなった。それでどちらの気持ちの方が大きいかどうか考えてみて、結局再びアメリカに戻ってきたんです」と言っていたのをなぜか印象的に良く覚えているのだが、まさか自分が同じようなことをするのはその時は思ってもみなかった。でも、僕がアメリカに戻ってきたのは、決してアメリカが懐かしかったからではない。もちろん日本が嫌になったからでもない。むしろ日本でも素晴らしい研究環境と仲間たちに恵まれて研究者として充実した日々を過ごしてきたと思うし、そのまま日本に残っていても構わなかった。ではなぜアメリカに戻ることにしたのか?それはそろそろ自分の研究室を持ちたいと思い、隣国韓国から果ては南アフリカまで世界中の40以

University of Massachusetts Amherst
森田 康裕

上の公募に応募した結果としてマサチューセッツ大学アマースト校からベストオファーをもらったからであり、それ以上でもそれ以下でもない。

僕は40歳を過ぎてようやく自分の研究室を持つことができた。同期採用の仲間は僕より5歳以上若い人が多い。全く引け目を感じないかと言えばそんなことはない。では、なぜ時間がかかったのか?僕の場合、自分のしたい研究が何なのかずっと分からなかった。これがやりたいことなのだと分かり始めたのは、大阪大学に移ってしばらくした2006年ごろか、もう少し後かもしれない。いや、今もこれが「本当に」やりたいことなのかどうかと問われれば、ちょっと自信がないというのが正直なところである。でも、人と違うユニークな研究テーマを見つけることができたし、研究をしていて楽しいので、今のところこれでいいのだろうと思っている。自分の研究したいテーマがあるということが、当たり前だけど、自分の研究室を持つ上で最も重要なことなのだろう。



写真1. 2013年5月現在の研究室のメンバー。院生二人、学部生四人、テクニシャン一人の構成。活気があって、楽しい。

もう一つの時間がかかった理由は、人生を楽しんだから(?)だろうか。未知の世界へ飛び込むことのリスクとそこから得られる喜び。それは人生を使ったギャンブルのようなものだ。「何も無理してアメリカの大学院に行かなくても、日本の大学院を出てからポスドクで留学すればいいじゃないですか」「日本に戻れないかもしれませんよ」。そんなことを何度言われたことだろう。実際英語が全く駄目だったので、イリノイ州のノースウェスタン大学で研究の手伝いをしながら大学院入学の準備に2年を費やした。でもその結果として得たアメリカの大学院時代のクラスメイト、研究室の仲間や恩師は僕にとって今でもかけがえのない最高の宝だ(写真2)。

Paul Englund研究室はアフリカ睡眠病の病原寄生虫トリパノソーマを研究対象にしていたので、研究室のメンバーは国際色豊かで彼らとの交流はとても楽しいものだった。様々な文化、様々な価値観、様々な人たちとの交わりは刺激になったし、何よりも僕に人としての豊かさを与えてくれた。

その後、卒業間近になり、次のステップを考え始めたときに学会で出会ったメルボルン大学のMalcolm McConville先生は、とても興味深い研究をしていた。気さくで話しやすく親しみがある一方で、切れ味は鋭く研究に対する妥協は無い。そんな人柄にも魅かれてポスドクを志願した。そして今も続く結核菌の研究はここで始まった。ポスドク時代は、新しい研究テーマにやりがいと面白さを感じ、オーストラリアの文化と自然にも刺激を受けながら、楽しく充実した時間を過ごした。妻と結婚して最初に住んだのもこの土地で、長男が産まれたこともあり、プライベートも盛りだくさんだった。

メルボルンでの3年間を終え大阪大学に移ったのにも色々な理由があったが、やはり一番は学会で親しくしていただいていた木下タロウ先生のもとで結核菌を違った角度から研究してみたいという気持ちが大きかったからだ。プロジェクトを持っていくことを許してくれたMalcolmと持ち込むことを許してくれたタロウ先生のサポートは僕が独立した一人前の研究者になるために大きな意味があったと思う。大阪でも楽しい研究生活をおくることができたし、妻も僕も東京出身だけど、電車の中で気軽に話しかけてきて、アメ玉をくれる大阪のおばちゃんはメルボルン帰りの僕たち家族に親しみを与えてくれた。

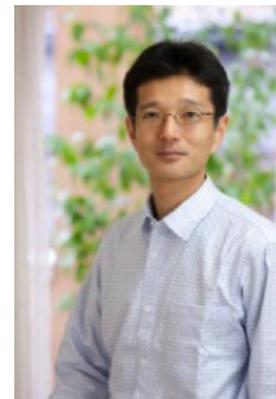
色々な土地に住んで新しい文化を体験する、新しい友に出会う、と同時にかつて住んだ土地を訪れて旧交を温める、そんなふれあいがある僕を豊かにしてくれるカンフル剤のようなものなのだ。でも、デメリットもある。それぞれの土地で最初は苦労するし、土地が変われば、前の地で積み上げた色々なものをもう一度積み上げ直すなくてはならない。時間のロスであり、順調にキャリアを積んでいくという意味ではあまり良い選択肢ではないかも知れない。でも僕は得たものの大きさを考えたら、それは些細なことだと思えば、今回の国際的な就職活動においても、僕のそのような生き方が一つのアピールポイントにはなったのではないかと感じている。



写真2. 2012年8月、Paulと久しぶりの再会。2010年に現役を退いたが今もサイエンスを熱く語る。ボルチモアにて。

研究室を主宰する立場に立つまで時間がかかってかえって良かったと思うこともある。まず一人の研究者として長く自分の研究に没頭する時間が与えられたと思う。そして結果として様々な考え方や手法を自分のものとして身につけることもできた。また学生を指導する経験を十分積むこともできたし、必ずしも研究費を得ることに汲々としなくて良いこともメリットだっただろう。そして何と云っても自分の研究テーマを熟成させる時間が与えられたことで、研究者としての進むべき道をより明確にすることができたと思う。僕には自分自身を待つ、その時間が必要だったのだ。

科学者という職業は、自分が面白いと思えることを仕事としてできるのだから、こんな幸せなことは無いと思う。さらに国境を超えて世界中の人と世界のどこでも仕事をできるのだから、素晴らしい職業だ。グローバル化とか国際競争力とか言うけれど、僕は単に個人として色々な国の人たちと交わることを楽しく思う。僕にとって世界はフラットであり、僕は科学者として世界を自由に行き来する、ただそれだけのことだ。世界は楽しい。これからも科学者であることを謳歌したい。



森田 康裕
Assistant Professor
Department of Microbiology
University of Massachusetts Amherst

国際基督教大学 B.A.
ジョンスホプキンス大学 Ph.D.
<http://www.micro.umass.edu/faculty-and-research/yasu-morita>

寄稿:私の「留活」～周りの力、自分にできること～

今からちょうど5年前の夏、私はアメリカで大学院留生活をはじめた。私の大学院留学が実現するまでに、本当に多くの方々に応援して頂き、大変感謝している。周りの方々の力を少しずつ貸して頂くことが無かったら、おそらく私は大学院留学をすることができなかっただろう。このたびは、私が大学院留学に漠然とした憧れを抱いていたステージから実現に至るまでの模索活動-私の「留活」とそのエッセンスを振り返ってみたい。

メンターとなる先輩方との出会い

私は高校時代の頃から海外留学へ漠然とした興味や憧れはあったのだが、それを実現するための行動力と自信はないまま、高校と大学を卒業して、東京にある大学で職員として働き始めた。私が大学で働くことに魅力を感じたのは、人の成長と密接に関わる教育や、新しい知を創造する研究を担う環境に身を置いていたいと思ったからだ。英語は好きで独学で勉強していたためか、新入職員として私は国際的な部門に配属され、留学生の支援を担当した。英語をツールとして使いながら仕事ができる嬉しさを感じると同時に、それまで憧れては諦めるということを繰り返してきた留学に対する思いが再燃した。ただ、当時は学部時代の時程若くもなかったし、漠然とした憧れだけで留学をするステージではないと感じていた。自分自身や親を納得させられるだけの、留学の形を見いだすことが必要だった。この時、大学院留学への道を模索する私の「留活」が始まった。

その当時の私には、大学院留学に関する情報は何も無かった。ただ、幸運なことに、大学で働いていたことと、国際的な業務に関連する部署で働いていたことによって、海外大学院留学経験者の先生に身近にお会いする機会が多くあった。私はそのような海外大学院留学経験者の先輩方に、まずは自分自身の海外大学院留学への興味を伝え、その方々の体験をお伺いし、実際に私が目指すことは可能なのか、それにはどういう準備が必要なのか、ありとあらゆる質問をさせて頂きながら、手探りで留学への道を模索した。その中で、私は大学職員としての経験を生かして、更にその分野としての専門家になること目指し、学生支援に関連した大学院レベルでの教育が充実したアメリカの大学院で学びたいと思うようになった。私の大学院留学への漠然としていた憧れは、留活を通じて、少しずつ具体的な計画に変わっていった。

不安と覚悟

だが、留学への道を模索して動き出した留活中にも、安定していた仕事を辞めて留学をすることに対する不安は、常に自分自身につきまとい、そして親やアドバイスを下さる先生などからももちろん指摘され、私の留学への思いを躊躇させることは度々あ

った。仕事を辞めて海外の大学院に入っても、英語で行われる授業についていって本当に卒業できるのか、そして、万が一卒業することができたとしても、その後に思い描いているように活躍することができるのか、誰も保証はしてくれない。留学に先立つ資金も必要だった。「海外留学をすることが全てではない」、だからこそ、「自分にとって本当に留学することがベストな選択肢なのだろうか」という問いに向き合わなくてはならなかった。

この問いに答えるために、私は自分自身でも情報収集や自己分析を行うとともに、海外留学経験者の先輩方からのアドバイスと励ましを受けながら、その時その時において自分ができるところを、自分にできる限りの力で行った。その一つとして、大学院の申請に当たっては、フルブライト奨学金への応募を勧められ、その応募に全力を尽くした。そして運良く奨学金を受給できることになり、先輩方からの話を参考に選んだアメリカの大学院にも合格することができ、仕事を辞めて留学することになった。それまでお世話になった上司や同僚、留学経験者の先輩方や周りの方への感謝の気持ちとともに、職を辞して大学院留学に行くことによる崖っぷちの覚悟と、また、フルブライト奨学生としての使命感をもって、私は海を渡った。

重要な、指導教員選び

大学院留学に当たっては、受け入れ先の指導教員との関係が留活生活の明暗を分けるので、留活中にできるだけこだわって、受け入れ先の指導教員を選んで欲しい。特に博士課程に留学する場合は、指導教員との関係が密になるので、この点が更に強調される。留活中には、ホームページに出ている情報などを参考にして、指導教員候補となる先生の研究テーマが自分の学術的な興味と近いかどうかを確認するとともに、ホームページには出ていない情報、例えば、先生の人柄や指導スタイルなどを知るために、その先生に直接会うか、知り合いや、その先生の指導学生などを介して印象を聞くなどした上で、慎重に留学先の大学院と指導教



指導教員がディレクターを務めるCenter For International Higher Educationのスタッフと。

員を絞り込んでいくことをおすすめする。

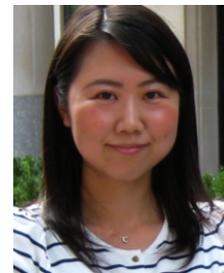
私は、留活中に海外留学経験者の先輩のアドバイスを頂けたおかげで、学術的にも人格的にも素晴らしい教員に師事を仰ぐことができています。修士課程の応募に際しては、そのプログラムを修了した日本人の先輩とお会いして、指導教員候補の先生が留学生の受け入れに慣れているということを事前に知ることができたので、初めての留学に安心して臨むことができた。また、博士課程についても、大学院留学経験者の先輩から、国際比較高等教育の分野で世界的に著名な現在の私の指導教員に、学術指導を受けることを勧められたことがきっかけで応募した。現在、そのような著名な先生と身近に接する中で、世界のトレンドを肌で感じ、学術的な感覚を磨くために大変理想的な環境にいることができています。その上、現在の指導教員は多忙ではあるが、必要があればすぐに私の学術指導に時間を割いてくれるので、その点も大変感謝している。

留活の先に

私自身の留活は、周りの方々から力をお借りすると同時に、そのときに自分ができることに全力で取り組んでいくという過程であった。私自身の留活中に、出会った大学院留学経験者の先輩の言葉を忘れない。「今すぐでなくても、そしてその方自身にはなくていいから、いつか私の留学が実現して、他の留学希望者の方に役に立てるときがきたら、そのような方々を同じように支えていって欲しい」と。私は留学中にも少しずつ、自分にできる範囲で他の方々

の留活を応援できるよう意識して過ごしている。米国大学院学生会の活動に関わらせて頂いているのもその一環であり、思いを共有する友人たちと協力しながら、大学院留学に興味のある方々の留活の支援に少しでも貢献できればと思っている。

私は留学中、目の前のセメスターの、目の前の授業の、目の前の課題をこなすことだけを見据えてきた。英語の議論に加われず、自分の英語力の無さを痛感して挫折感を味わうことも多々あったし、論文課題の締め切りに追われ、精神的にも体力的にも追いつめられる時期を何度も経験した。そんな私も、この夏、学生として最後の課題である博士論文の執筆に取り組んでいる。博士課程の修了という目標の先を見据え、また新しい目標に向かってシフトをする時期に来ていると最近感じている。博士論文をしっかりと終わることができたら、私を大学院留学の前から現在に至るまで支えて下さった方々への感謝の気持ちを忘れずに、今度は私が後輩たちにできることを返していけたらと思っている。



新見 有紀子
Higher Education Ph.D Program
Lynch School of Education, Boston College

Florida State University
森山 貴仁

寄稿：フロリダのちょっとしたはなし

あれは院生の友人と二人で、お世話になっている先生のお宅へ向かうときの会話だったと思う。11月の感謝祭が間近に迫った時期で、多くの学生が実家に戻るなか、大学近辺に残っていた僕たちを先生が夕食に招待してくれたのだった。感謝祭というのは、クリスマスと並んでアメリカで盛大に祝われるイベントのようで、友人のおうちでも親戚一同60人以上が集まることがあると言っていた。その人数に驚いた僕は彼女がユダヤ系だからかと思ったけれど、彼女の答えはそうではなかった。ううん、南部だからよ。

...

僕は去年の秋から、フロリダ州北部のタラハシーという街で暮らしています。ここでは友達や街の話など、気の抜けたコーラみたいな話でもしてみましょう。

フロリダ州は北と南でずいぶんと雰囲気が違っている。移民も多くリベラルな空気のあるマイアミのような州南端とは対照的に、州北部はやや保守的な色合いを帯びる。アメリカ全体から見れば「南部」に属する地域だけれども、かといって、奴隷制度や人種主義と結びつけられやすい「深南部」ともまた異なっている。ともかく多くの留学生の目的地であろうニューヨークやボストン、カリフォ

ルニアとは趣が違う土地だと言っているかと思う。

去年の秋、僕が初めてタラハシーの小さな空港に降り立った日は大雨で、大都市のような街の中心部までの公共交通機関もなかったため、タクシーを利用してダウンタウンまで行くことにした。タクシーの運転手は口ひげをたくわえた中年の白人男性で、話し好きの親切な人物だった。ただ、僕がアメリカ政治史を、特に保守主義を研究しているという身の上話から政治の話にうつると、彼がリベラルの政治に批判的な人だということがわかってきた。彼にとって、この数十年アメリカの連邦政府は大きくなりすぎたのであり、その巨大な政府は人民から税金を取りすぎている。当然のことながら、その運転手はオバマ政権を快く見ていなかった。

院生の中にも、リベラルとは異なる考え方の持ち主はいる。休日のパーティで気楽に話をしていると、僕は保守派だよ、という人がいた。そう言った人はニューヨーク出身だけれど、ニューヨーク市ではなくて州北部の生まれらしい。彼に言わせればそういった地域は「牛の郷」なのだとか。彼が別の機会に催したパーティは「1950年代風」と銘打っていて、僕は参加できなかったけれども、みんなどんな格好をして集まったのだろうか。

また他の友人も、君の保守主義の研究に興味があるよ、と僕に

話してきたことがあった。もしかして君も保守派なの、と聞いてみると、彼はそのとき被っていたキャップを指差した。NRA、National Rifle Association、銃保持者による団体で、銃規制の問題が持ち上がるとそれに反対するグループとして、ニュースで聞いたことのある人も多いだろう。友人によると、うちの大学では武器を隠して携帯する人達による組織もあるのだという。いわゆるCCW(carrying a concealed weapon)というものだ。

アメリカの大学コミュニティというのは基本的にリベラルが主流であって、もちろんリベラルの学生も多い。2012年大統領選挙の時にはボランティアとして積極的に関わった院生も何人かいて、共和党穏健派としてロムニー氏を支持する人もいれば、オバマ陣営の募金活動に携わる者もいた。さらにはマルクス共産主義の支持者だっている。そのうちの一人は19世紀初頭の環大西洋史をやっている、上のNRAの院生が同じく19世紀史を専攻していることから、ふたり一緒に歴史観光をしているのを見ると、なんだか微笑ましかった。

友人の一人は大学キャンパスのすぐ北にあるフレンチタウンという地区に住んでいる。たいていの人々が、そんなところにいて大丈夫？ と聞くような場所だ。うん、実際に住んだら特に何も無いよ、というのが友人のいつもの返事。このフレンチタウンは貧しく治安の悪い区域として地元では知られていて、同時にアフリカ系アメリカ人の住民が多数を占めている。アメリカでの生活が初めてだった僕は、危ないところだという噂に少し怯えていたけれども、実際に歩いてみると道ですれ違う人達は不思議なくらい朗らかで愛想がいい。でもそのあたりの店に限っては窓に鉄格子が必ずはめられていて、やっぱり暗い時間帯には出歩かない方がいいだろうな、とは思ふ。そして数々の教会。教会は、アフリカ系にとって、昔から自分たちで自治的に運営できる数少ない組織と聞いたが、狭い地区のあちこちに教会が立っている。



1962年からアフリカ系アメリカ人の学生を受入れ始めたことを記念する、フロリダ州立大学統合のモニュメント。

そのフレンチタウンに住む友人は陸軍に在籍していた。僕がいたフロリダ州立大学の歴史学部には、彼のように軍務をへて大学院に入ってきた人や、2年ほどの休暇をとって修士号の取得を目指す人が何人かいる。アメリカでは軍から普通の大学に戻って、修士号などの学位をキャリアに役立てることが少なくないらしく、日米の違いを感じさせる。

そのうちショーンが二人いて、僕達のあいだでは「陸軍のショーン」「空軍のショーン」と呼ばれている。陸軍のショーンは大尉だから、軍では100人から200人の部下を率いる立場だろうか。授業でもよく冗談を飛ばして大声で笑う、からりとした性格の人だ。僕がニューオーリンズの有名なカーニヴァル、マルディグラを見てきたときのこと。へえ、楽しかった？ とみんなが聞いてくる一方で、ショーンはお楽しみだったかあ、がはは、と陽気に笑っていた(何のことだか分からない人は「大人のマルディグラ」で調べてみましょう)。

空軍のショーンの方は落ち着いた雰囲気のある人物で、物腰の柔らかい空気を漂わせているから、僕でも話しかけやすい。彼との会話で妙に記憶に残っているのはパワーポイントの話だ。授業も終わりに近づき僕達学生が研究報告の準備をしていた頃、発表の仕方に話題が飛んだことがあった。原稿だけを用意して教室の前で話し続ける人もいれば、パワーポイントまでしっかり準備する人もいる。ショーンが言うには、軍のプレゼンでパワーポイントにやたら凝る奴がいて周りからは「Power Point Wizard」と揶揄されるそうだ。それが僕の頭の中で、パワーポイントの発表に多少うんざりしていた日本の会社勤めの人の話とつながって、そういう話は世間のどこでもあるんだな、とおかしく思えたものだった。

夏の学期も終わって、空軍のショーンが僕を含めて何人かを自宅の夕食に招いてくれた。ショーンや他の友人が小さい子どもを育てていることから、自然と子育ての話題になったが、たいていこういう類の話だと南部では体罰が根強く残っていると話に出る。僕の姉の話などでは、専門家の意見の変化とともに育児も今と昔では大きく変わったそうだけれど、日本と比べてアメリカでは世代より地域の差が顕著なのかもしれない。いや、単に独り身の僕が無知なだけで、日本でもそんなものなのだろうか。

フロリダで暮らしてもうすぐ一年になる。日本では見られない物事に多く触れたし、どこでも一緒と思えるようなことにもたくさん出会った。アメリカについて何かを語るには過ぎた時間が短い、いやむしろ、深く知れば知るほど語ることは難しくなるのかもしれない。いずれにせよ、アメリカ生活の一つの側面としてこれらの話を楽しんでもらえれば幸いです。



森山 貴仁
Department of History
Florida State University

連載: アメリカ留学とインターンシップ (2) ランド研究所でのインターンシップ

Air War College, United States Air Force
片桐 範之

前号で私は、インターンシップがどうアメリカ留学と就職に活かせるかを広義的に書きました。今回は私が2008年の間に経験した、ワシントンのランド研究所でのフェローシップについて少し具体的に書きたいと思います。

ランド研究所は冷戦時代に特に核兵器と核抑止の分野で大きな貢献を残し、それ以来アメリカ政府(特にアメリカ空軍)や一般企業、そして海外の政府などがその事業をサポートする研究機関として有名です。ここ数年は軍事問題だけでなく、数学、経済学、歴史学など幅広く用い文字通り学際的な研究を奨励しているため、その研究員は政治学者だけでなく様々な専門分野から選ばれています。また、ワシントンの一部の研究所で見られる政治思想の影響が極めて少なく、イデオロギーではなく研究の重要性やその結果で評価される、極めて科学的実証性を追及する研究機関とも言えます。ランドは主にサンタモニカとワシントンのオフィスが知られていますが、ピッツバーグやニューオーリンズにも事務所があり、海外ではイギリスのケンブリッジ、ブリュッセル、そしてドーハなどへも進出しています。

ランド研究所からウェブサイトのアプリケーション(出願書類)を得て博士候補専用の有期フェローシップを頂き、博士論文の内容にできるだけ近いトピックを選びました。その内容は主に安全保障の分野における戦略コミュニケーションの問題を南アジアを中心に展開するアルカイダに対して応用するというものでした。執筆していた非対称戦争の過程と結果についての博士論文にできるだけ貢献をする形で、指導教官の許可を得てランドのワシントン・オフィスに勤務し研究することになりました。ランドでは私の研究に興味を持ってくれた上級研究員がアドバイザーとして付き、毎週何度か彼と打ち合わせをして新しい研究材料や視点をもらっていました。フェローシップの後半では、研究員各々の研究発表会が行われ、当時お世話になったアドバイザーや似たような研究をしている専門家呼び(もしくはテレカンファレンスでつなぎ)、2時間ほどその成果を発表し、内容に対するフィードバックを得ることができました。

ここで重要だと感じたのは、博士論文とインターンシップとのバランスを保ちつつ社会経験を積むことです。私が当時常に心掛けていたのが、ランドでの仕事はあくまで二次的であり最も重要なのは博士論文を終わらせることであると意識することでした。従って大学院の指導教官にはなぜこのフェローシップが博士論文を終わらせるために重要かを説明し、彼の許可を得た上でランドからのオファーにサインをしました。また、ランドでのアドバイザーもその事を理解してくれた方だったので、仕事もいい感じで進めることができました。

ランド研究所での機会はある意味で就職活動としても捕らえることができます。まず私が指摘したいのはその研究の過程で様々

な人に直接会い、研究内容や目的を話し、インタビューする必要性です。私の場合は軍事問題を中心に、ペンタゴンやアフガニスタン等で活動する国の代表者などとアポを取り、彼らのオフィスで話をする機会が多くありました。普通の博士論文執筆の際とは一段違う研究環境に身を置くことにより、以前にも増して他では得られない様々なアクセス権限、様々な専門家との議論の機会、その他の経験を得ることになります。政策関係の研究機関の多いワシントンの独特の雰囲気も味わうこともできました。博士課程の大学院ではアクセスすることがほぼ不可能の情報も得ることができましたし、オフィスにある図書館には何より軍事問題の研究材料が極めて豊富でした。国防総省で働く今となっては特に驚くこともありませんが、当時の私にとっては毎日が発見の日々でした。

更に、将来ランドでの就職を希望している方にとってはこの機会はとても有益なはずでです。私の同期のメンバーも数名、博士課程終了と同時にランドで就職しています。また、同期の数名はフェローシップの最中に事実上研究チームに入り込み、研究内容の出版やその後のフォロー・オン研究に長期的に従事した者もいました。また、当時は毎月40万円ほどの給料と交通費が別に支給されたため、比較的物価の高いワシントンでも普通の生活はできましたし、このフェローシップのほとんどの参加者は各々の大学院からも給料を得て生活していたため、一般的に研究に集中できる環境ができあがります。

今回の話をまとめると、この種のインターンシップ(フェローシップ)の重要性は学問とのバランス、そして就職活動の一環として捉えることにあると考えることができます。留学生の皆様にとって最も重要なのはもちろん学業を十分こなすことですが、その学業を促進する形でインターンシップを利用することができます。



片桐 範之
Assistant Professor
Department of International Security Studies
Air War College, United States Air Force

※ここにある見解は私個人のものであり、必ずしもアメリカ政府、国防総省、もしくはアメリカ空軍戦争大学の政策を反映するものではありません。

お知らせ: メンタープログラムのご案内

米国大学院学生会では2010年の活動開始以来、アメリカ大学院への出願を1対1で支援する“Mentor Program”を行っており、これまでの三年間で多数の留学希望者を支援してきました。Mentor Programは当会の三つの看板プログラムのうちの一つで、応募者数を上回る数多くの留学経験者の皆さまがボランティアで応募指導してくださっています。

今年度は、年内など早期の出願の方が十分なサポートを受けられるように、七月に留学希望者・学位留学サポーター募集を開始しました。当会WEBサイト [注0] から登録を行なって下さい。

留学希望者の方へ

登録の際に英語400語程度のStatement of Purpose(自己推薦エッセイ)を作成して頂いています。これは“なぜ XXX 大学院に留学したいのか?”という問いに答えるもので、出願書類の中でも特に重要な書類です。登録時に提出して頂くものは完璧でなくても構いませんが、自分の熱意やセールスポイントを具体的に整理するよう心がけてください。どのような書き始めればいいのか分からない場合には、Statement of Purposeの一般的な書き方について、書籍やインターネットでリサーチをすることも可能と思います。

Mentor Programは出願時期が1年以内の(2014年6月までに応募書類を提出する)受験生を対象にしております。対象者を限定させて頂いている理由は、受験生の抱える質問(主にStatement of Purposeのアドバイス・添削)が漠然とし過ぎていると1対1のサポートの効果が薄れるためです。一年以上先での留学・受験を検討している方は、“質問ネットワーク” [注1] という掲示板形式のシ

ステムをご利用下さい。

米国大学院学生会の三種のツールである「留学説明会、News Letter、Mentor Program」が留学を希望する皆さんの夢の実現の一助になればと期待しております。

学位留学サポーター(留学経験者)へ

学位留学サポーターとしてご協力くださる皆様には、(紙面を借りまして)心より厚く御礼申し上げます。皆様にご協力頂きたいサポートは二種類ございます。

(1) 1対1でのサポート

これまでサポートを行なって下さった方々による任意調査では、1人の留学希望者のサポートに要した時間は合計で5時間以内となっており、主な内容はStatement of Purposeの添削ですが、人によっては遠隔動画通話などで細かい相談も受けているようです。

(2) “質問ネットワーク” 上での質問への応答

こちらは受験まで一年以上ある方を主に対象にした匿名制のオンライン掲示板です。お時間が許す範囲内でご自由にご回答ください。また、新たな質問・回答が投稿された際にはメールで通知されるようになっています。

留学希望者が自信を持って出願できるよう、ご指導・ご鞭撻のほど、宜しくお願いいたします。

[注0] <http://gakuiryugaku.net/news/2468>

[注1] www.google.com/moderator/#16/e=1f319d

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

原 健太郎 石原 圭祐 高野 陽平
山田 亜紀 辻井 快

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動(留学説明会、メンタープログラム)に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加をお願いします。

<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

2013年夏の大学院留学説明会も東京大学を残し無事終了致しました。説明会には多くの方々ご参加いただき、いずれの会場も大変盛り上がり大成功に終わりました。私は北海道大学での説明会に講演者として初参加をしましたが、非常に元気な学生さんが多く、参加者の

方達との交流を通してこちらも多くの刺激を受けました。今後も留学経験者として、少しでも留学を目指す方達のお役に立てればと思います。

8月1日には東京大学で今夏最後の説明会が行われます。お近くで興味のある方はぜひ参加してみてください(高野)

私もニュースレター編集部の高野と同じく、夏の大阪府立大学の説明会の方にパネリストとして参加して来ました。会場でニュースレターを読んでくださった方々から、直接お会いし意見を頂く事ができ、ニュースレター班の一員としてとても嬉しく思えました。(山田)